ふるさとだより

月刊 第 578 号

秋の新緑と曼珠沙華

春は新緑秋は紅葉が常識なのですが、今年の寺泊の海岸部は丁度春の芽吹きの時のような美しい緑が見られます。まさに秋の新緑です。

大型の台風が三度も佐渡沖通過と言う同じコースでやってきました。強烈な塩風にさらされた木々の葉は順調な落葉の季節を待たずに散りはじめました。

本堂の脇に樹令五百年程の一本の欅があります。太さは凡そ五メートル強ですが中はガラン洞で昭和二十二年の火災で大変な痛手を受けたのですが復活して大きく枝を拡げています。例年はまだ落葉の時期ではないのですが今年は已に⅔以上葉を落とし90リッターのゴミ袋に二十七個もの量になりました。

すっかり落葉した枝からは次々と新芽が出て残った葉と新緑が同居と言う状態です。

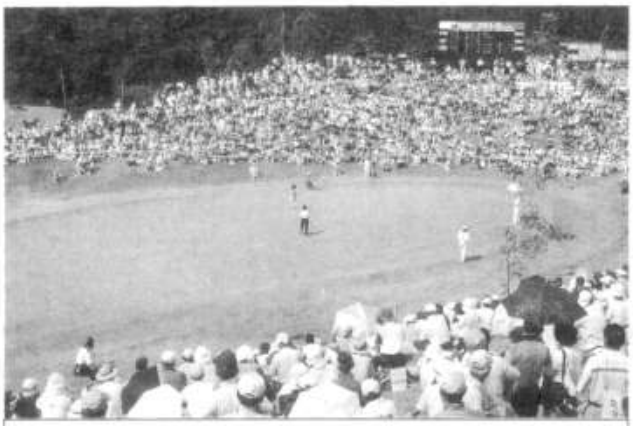
風の吹き通す内陸部では海へ面している半分は新緑で海風の当らない半分はそろそろ枯葉色と言う今迄に見たことのない姿の木もあります。そんな現象の延長線上に当然の結果としてツツジ、木蓮、サクラなどの花が狂い咲きしています。台風の後遺症なのでしょうが、来年の春にはそれらの樹木はどんなことになるのか聊か心配です。

刈入れもほとんど終ったようですが海岸に近い稲は大部被害を受けているようで丁度成熟期に塩風が吹きつけたことで立枯れ状態になったようです。

八月末寺泊の夏の最終イベントであるヨネックス女子オープンゴルフも暑い天候の中での熱戦、寺泊体育協会を中心に多くのボランティアも参加して（写真参照）盛会裡に閉幕。

十九日の日曜には長い間ふるさとだよりを書きつづけてこられた聖徳寺十五代住職窪沢泰忍殿の三回忌の法要が多くの檀中の方々のお参りの下勤修されました。軍隊生活、闘病生活、布教活動、執筆活動等々大活躍の生涯でしたから思い出つきぬ法要であったことと思われます。

九月二十日からは秋の彼岸です。お盆にきれいに掃除された墓所はその後の台風で落葉に埋れていますので彼岸に向けて三々五々再度のお墓掃除です。カンカン照りの夏は蚊も姿を見せませんでしたがその後の適度な雨で草も元気を出し蚊も出没。普段は御無沙汰し勝ちの御先祖様方への申訳けも果たしてこの季節は家庭の仏壇もお墓も曼珠沙華の花が沢山供えられます。別名彼岸花とも言われることで、あの炎のような形と言い燃える真紅の色合いと言い印象深い花



寺泊８月の締めくくりはヨネックスレディースゴルフ大会。大勢の町民ボランティアに支えられて今年の優勝者は馬場ゆかり。注目の宮里藍は５位。

夏休みの終り頃になると剣士姿が町を闊歩する。県下の剣道合宿講習会である。例年のことで町民と顔なじみも多い。

暑さ寒さも彼岸まで。今年はまさにそんな彼岸日和であった。おときも大事な儀式のひとつ。お味の方は如何でしょうかな。

です。「赤い花なら曼珠沙華」と「ジャガタラお春」の歌詞はある年代の方なら一度は口ずさんだ経験をお持ちのことと思います。この花の咲き方はまさに神出鬼没と言ったところで思いもかけぬ草むらにポツンと一本咲いているかと思えば、墓地の一隅や畦道に沿って絡み合う程に群をなして咲いたりと、特に秋に入ると赤い花の少ない中での出現にはびっくりさせられます。たいていの花は葉が繁ってやがて花が咲き出すと言うのが普通なのにこの花に限っては花の季節には全く葉は姿を消しているので恐らく春にはちゃんと葉も出揃うのでしょうがどんな葉っぱなのか見当もつかないのです。幽霊花などと呼ぶ人がいるのもうなづけると言うものです。

敬老の日があり、各地で敬老会が催されるのもこの季節。敢えてそうゆうことになっているのも日頃忘れられ勝ちと言うことの裏がえしと言うことになるのでしょうか。近所の町内役員の方が記念品を配っておられて、うちの班は一軒の家のお母さんを除いて全員が記念品対象者です、には驚きました。これからシーサイドマラソン、農業祭、観光魚まつりと秋のイベントがはじまります。

志士 本間精一郎

さとうのぶひと

先月号に、片町の旧農協が取り壊されている写真が載っていました。説明にあった通り、かつてそこには寺泊の生んだ幕末維新の志士、本間精一郎の生家がありました。

社会が不透明になりいわゆる乱世と呼ばれる時代になると、決まって持てはやされるのが幕末維新です。NHK大河ドラマで「新撰組」をやっていますし、このところ話題をさらった時代物映画、真田広之の「たそがれ清兵衛」、中井貴一の「壬生義士伝」、トム・クルーズの「ラスト・サムライ」、いずれも幕末維新が舞台になっています。

本間精一郎、二十九年の波乱に満ちた生涯は、映画になっておかしくありません。「玉虫海気の小袖に、紫縮緬の羽織にて、大髷を抜き出し、ぎょうぎょうしき態也」。これは後、天誅組を指揮する吉村寅太郎とともに、土佐藩大坂の住吉陣屋を遊説に訪れた本間の服装です。役者のように目立ったことは疑うべくもありません。六尺豊かな美丈夫、北辰一刀流の使い手。勤皇の志を弁舌さわやか西国に遊説して回り、風を切って京の町を行く本間の姿がほうふつといたします。

本間精一郎は天保五年（一八三四）寺泊の生まれ。十四歳から六年間、与板の儒者斎藤赤城門下生として過ごしました。二十歳で江戸に出、対露交渉のエキスパートで名を馳せた幕閣川路聖謨の小姓となりました。川路聖謨は佐渡奉行、大坂町奉行などを経て勘定奉行に上りつめた、当時の最も進歩的な幕臣の一人です。本間家とのつながりは、おそらく佐渡奉行の時代に始まったと思われます。

安政五年（一八五八）日米通商条約調印の勅許を得るため、川路は老中首座の堀田正睦に随行して上京、本間も一行に加わります。この勅許奏請は失敗、この年大老に就任した井伊直弼によって川路は失脚します。

この時代、「国」の概念が大きく変わろうとしていました。これまで「国」といえば「越後の国」や「武蔵の国」だったのですが、米露英仏の度重なる外

敬老会に参加の方々。カミからシモまでバスで送迎。
いや別に男性禁止ではないのです。
どなたか顔見知りはおいででしょうか。

幼稚園の園児たちが遊戯をご披露。
この子供達もやがて見物席へまわる時がくる。
まさに諸行無常の理。

左側が京都木屋町通りにある碑。今はすきやき料亭。
右は生誕の地。
二十九歳の生涯であった。

ライブコンサート ハーバーライト・イン 文化会館はまなすホール

十月二十三日（土）六時開場 六時半開演
一般 三千円・学生 二千円

〈第一部〉ウリアナ（モンゴル）の中国古箏演奏・ハーモニカとのデュオ。斉藤寿孝（副音ハーモニカ）、倉井夏樹（ブルースハープ）、ギター本沢あきよしの演奏。

〈第二部〉楽しいジャズ テナーサックス芦田、トランペット光井、トロンボーン河辺とカンサスシティートリオによる演奏。

◇音楽は心のリハビリ！

最近少し客足が遠のいていると言うものの、寺泊の釣船は仲々の盛況である。
出航時の釣人の胸中や如何に。

帰港すると、いっ時話に花が咲く。
特に鯛釣りの場合は明暗鮮明。
あの逃がした大物惜しかったの話も。

朝4：30、昼11：30、夜6：00と週末ともなれば1日3回の出航もある。帰港は23：30。
唯今夜釣の出航。

圧で、日本全体が一国として意識されはじめていました。

徳川幕藩体制は鎌倉幕府以来の将軍宣下、天皇が徳川家を征夷大将軍に任ずるという形式を守っていました。将軍は「国」の代表ではない。幕府が勝手に外国と条約を結ぶのはおかしい。「国」の概念が変わり、外交の主権（国家主権）が幕府にあるのか朝廷にあるのか大いに揺れていました。

川路聖謨は早くから青蓮院宮の知遇を得ていました。本間が京都で宮家に出入りし、その「家来」と称したのは、川路の斡旋によっています。幕閣の息のかかった本間が「勤皇」などと変に思われるかもしれませんが、そういう事情があったのです。

しかし本間の勤皇の志は、別のところから出ていると思います。それは寺泊が順徳上皇ゆかりの地であったことです。寺泊には、承久三年（一二二一）鎌倉幕府に敗れ、佐渡配流になった上皇がお船待ちをした史実が伝わっています。本間の中には、六百年前の「承久の乱」において倒幕の夢を果たせず佐渡に没した、順徳上皇の無念が渦巻いていたと思われます。

弁舌と知謀にたけ、文筆能力に優れた本間は、宮家や公家社会の奥深く入り込み、たちまち朝議に影響を与えるほどの大物になっていました。本間のしたためた「朝廷内部に裏切り者がいる。それを取り除かなければならない」という趣旨の書簡は、浪士の書いたもので天皇の目に触れた唯一のものと言われています。

藩の後ろ盾を持たぬ一匹狼という点で、新撰組の前身である浪士組を組織し、のち尊攘派に転じた清川八郎と似ています。本間精一郎は、清川とも親しかったと言われています。（青柳清作『寺泊の歴史』1961。『大岡昇平集7』岩波書店1983）

誌代御後援（敬称略・順不同）

東京都 菊池 武夫 金五千円
藤沢市 外山勘次郎 金五千円
茅ケ崎市 家老 淳子 金三千円
四街道市 外山 健太 金三千円
静岡市 坂本 忠世 金五千円
相模原市 柳下 武明 金五千円
札幌市 外山 雅章 金五千円
千葉市 五十嵐甲子男 金五千円
上尾市 松井 繁男 金五千円
新潟市 外山 和 金三千円
〃 柳下 忠夫 金三千円
〃 平井 英次郎 金三千円
〃 石山 功 壱万円
〃 斉藤 泰子 金三千円
三条市 八木 芳夫 金五千円
燕市 吉田町 内藤 マツ 金三千円
分水町 田村 秀子 金三千円
寺泊町 法福寺 武治 金五千円
〃 竹内 洋一 金三千円
〃 能登 六郎 金三千円
〃 解良 明美 金五千円
〃 柳下 中野 宏 金三千円
〃 河合 誠司 金五千円
〃 竹内 文男 金三千円
〃 住吉 三郎 金三千円
〃 佐藤 光子 金三千円
さいたま市 関本 隆 金三千円
横浜市 関本 清 金三千円
弥彦村 金三千円

小波会九月句会詠草

兼題　星月夜・秋の蝶他当季

星月夜
きらめく流れ信濃川　竹内　霍山

深酒の
眼にあふる星月夜　外山　海子

瞬くは
夜間飛行機星月夜　水沢　蕉子

町の灯の
届かぬ空や星月夜　斉藤　紫苑

舫い舟
静かに揺れて星月夜　江原　汀子

木陰より
戯れつつ秋の蝶二つ　小島　温石

花群へ
風の逆らう秋の蝶　外山きよし

秋の蝶
はや高みへの飛翔なし　中村　流瓢

秋まつり
屋号渾名で呼び合えり　加勢　白汀

お年頃
浴衣の似合うとなりの子　能登　頑牛

風の盆
男踊りに胸さわぐ　小島　冬扇

たましひの
涙のけぶり秋刀魚かな　内藤　蓮子

哲学も
詩もある世界蟲の秋　大越碧水子

柚子の香や
遅き朝餉に顔揃ふ　小形　美代

あとがき

オリンピックも終りました。猛暑寝不足の夏の終りと言うところでしょうか。私は台風を警戒しながらオリンピック観戦の一夜と言うのもありました。

今は秋風の中でパラリンピックでも日本選手大活躍で競技にかける情熱と大志に感激しております。

今月はたまたま編集会議でさとうさんは本間精一郎を書くことになり、それにつづく五十嵐伊織、窪沢円一、柳下安太郎など大きく国が変わろうとしていた時代のふるさとの若者達のことを思うとその情熱と大志が脈々と郷土人の血の中に流れつづいているのではないかと寺泊会発足当時のことが偲ばれます。寺泊会も来年は五十周年。聖徳寺さんで資料等整理された中で三十周年四十周年の記念誌の残部があるとのことでした。編集会議で相談の結果

二冊セット価格　四千円
単品三十周年号　三千円
〃四十周年号　二千円で

頒布することにいたしました。御希望の方がありましたら電話又はFAXでお申込み下さい。

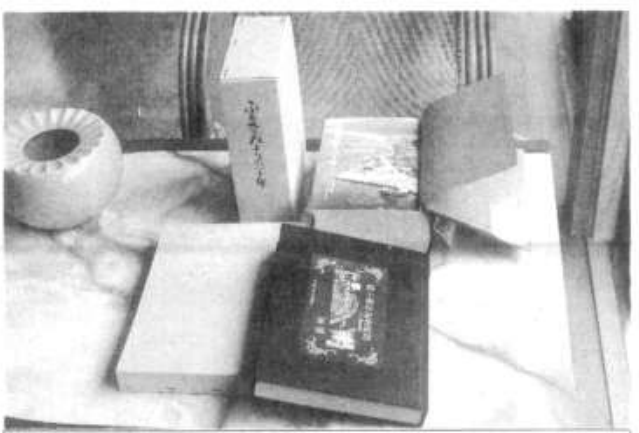
電話〇二五八―七五―二三二九
FAX〇二五八―七五―二四三〇

少し紙に黄ばみがありますが保存度は良好、ケース入りです。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
誌代税共（百円）
編集人　発行人　中村興樹
発行所　新潟県寺泊町　ふるさとだより
郵便番号　九四〇―二五〇二
ダイヤル局番　〇二五八七五
電話　二〇二九番
振替番号〇〇六二〇―三―五七四五
印刷所　吉野印刷株式会社

うちの白蓮が咲いていますて、と電話を頂いたので早速撮影。
サクラ、ツツジ、コブシと季節外れの花咲台風。

実りの季節、三世代総出の刈り入れである。
こんな日の夕食は多分心豊かな賑わいであろう。



三十周年 四十周年の記念誌である。残りは70冊程です。
遠くの方は御連絡下されば送ります。
プレゼントにもどうぞ。